

7 ベトナム

スカートからズボンへ、そしてスカートへ？

竹内 郁雄

普段着といつてもファッションに関するものである限り、女性が話題の中心にならざるを得ない。これは、筆者が男性であつて意識が特に女性に傾くという事情が手伝つてはいる。しかし、ベトナムでは女性の大半が勤労婦人であるため、女性を中心に据えたとしても、社会状況の一端を窺い知ることはできるように思える。

「アオザイ」の ベトナム女性というと、誰でもすぐに連想するのがアオザイ (áo dài) である。長く、すその広がった絹のズボンと、脇に切り込みを入れた、これ

つである。しかし、アオザイが、ベトナム語では、アオが「衣服一般」を、ザイが「長い」を示すように、「長服」を意味すること、そして、現在のアオザイの起源が中国発であつたことは、あまり知られていない。

時は十九世紀、フランスの植民地支配の影が忍び寄るなか、中国化政策を推し進めていた皇帝  
明命（ミンマン）帝は、当時の中国宮廷女性がズボンを着用していたことに鑑み、これも右へ習  
えと、ベトナム女性にズボンの着用を強要した。ズボンを着用するアオザイの歴史はここに始ま  
るのであり、植民地時代の経過とともに、長いスカートに代わってズボンⅡアオザイがベトナム  
女性の腰をおおっていったのである。その意味では、中国ですたれた衣装が隣国ベトナムの民族  
衣装となったわけであり、実際、ベトナム女性は最近までズボン以外の衣服を知らなかったので  
ある。

アオザイの着用には、年齢に応じたきまりがある。特に未婚女性は、白いアオザイを多用する。  
その際、ブラウスの脇の切れ目とズボンの間から、脇の素肌が三角形にひよこつと覗くことが絶  
対要件なのであり、そのセクシーさが、この服を世界有数の民族衣装にまで高めた理由であろう。  
他方、既婚者は、正装の場合、ズボンは白のままであるが、ブラウスは赤など原色のもの、そし  
て脇の切れ目の浅いものを着用する。亭主持ちちは、脇の素肌が他の男性の目に触れることをつ  
しむのである。晩年に至ると、ブラウスは、茶系統、青系統といった地味なものに変わり、脇の  
切れ目も年齢に応じて下がっていく。例えば、六十歳前後の婦人であれば、切れ目は膝あたりに  
ある、といった具合にである。

ところで、アオザイは、ホテルなどの従業員が観光客用に着用しているのを除いて、現在では  
「礼服」化を強め、日本の「着物（きもの）」と同様、冠婚葬祭（ただし現実には葬儀は除く）の

折にのみ着用する衣服となりつつある。これは、特にベトナム北部（かつてのベトナム民主共和国地域）において、そうである。

「アオ・バーバー」と

「バジャマ」様の室内着

国解放の後方と

一九六〇年代には、まだアオザイを着用する女性の多かった、サイゴン（現ホーチミン）などベトナム南部とは異なり、ベトナム戦争において祖  
なつた北部では、奢侈に流れる条件が  
乏しかったこともあり、女性は、すでに  
第二次世界大戦以来質素な普通の衣服  
を多用するようになった。白い木綿  
のブラウスに、やはり裾の広がつた黒  
いズボンからなる、アオ・バーバー  
(ao ba ba) と呼ばれる作業着がそれ  
であり、これが現在に至る普段着であ  
る。

アオ・バーバーは質素な衣装ではあ  
るが、農村の女性の場合、こうした白  
いブラウスでさえ袖を通すことは減多



アオザイ姿の女性（ベトナム南部プンタウにて）

ない。紅河デルタの農村は、水をこの紅河から引いているが、紅河の水が赤土を多量に含んでいるため（だから「紅河」と呼ばれる）、洗濯すれば白い衣服は茶色く染まってしまうからである。このため、農村の婦人が好んで着用するのは、洗っても色変わりする心配のない茶系統のブラウスということになる。白いブラウスは、首都ハノイや海港ハイフォンへ出向く際の「よそ行き」として、とっておかれる。

首都ハノイでは、若い女性は、普通、外出用の衣服と自宅内の衣服を区別する。上述したアオ・バーバーが外出用とすれば、室内で着用するのは、パジャマのような衣服である。昨今では、色とりどりの、または花柄の「パジャマ」が増えたが、要はブラウスもズボンも同じ布地から作られていることである。近所の人々や友人を自宅で接待する場合は、こうした衣服でもいっこうに構わない。ただし、いったん外へ出るとなると、彼女らは、少なくともズボンは、外出用のものに穿き替えるのが普通である。外から自宅へ帰ってくれば、再び着替えて、「パジャマ」を着用する。

#### 下着・帽子・サンダ

#### ラス・サンダル

一九八〇年代中葉にこの国を初めて訪問したとき、女性が、かなり年配の老婦人をも含めてブラジャーを着用しているのには驚いた。日本の場合、昭和初頭の白木屋火事の後の下穿きが、そして第二次世界大戦後にブラジャーが普及したとされているが、ベトナムの場合、フランスの植民地であったこともあり、こうしたアンダーウエアの普及は早かったといわれる。

触れておきたいのは、ベトナム女性における帽子とサンングラスの多用である。ここで言う帽子は、ノーン (Non) と呼ばれる編笠である。南国であるため、元来農作業に欠かせなかったノーンは、現在、外出時の日ざしを避ける不可欠のグッズとなっている。また、北部と比べて日ざしが非常に強い南部では、婦人がサンングラスを利用する機会が多くなる。

履物は、一般にサンダルである。抗仏戦のさなか、自動車タイヤをリサイクルすべく故ホーチミン主席が考案したとされる「ホーチミン・サンダル」は、現在も売られてはいるが、利用者は激減している。一般に女性の場合は、ビニール製のサンダルか、花柄をあしらった木製のヒールの高いそれである。

## ファッションの

一九七六年の南北統一後、ベトナムは、ファッションの面でも「二段階革命」を経験してきている。

## 「二段階革命」

第一のムーブメントは、統一直後に起こった。都市部の青年女性らにおけるカラーブラウスやスラックス、そしてジーンズの多用がそれである。

どこの国でもそうであろうが、従来のアオ・バーバーは、中年以上の婦人ならばともかく、少なくとも若い女性をチャージミングに見せるといふ点では効用の低い衣装であった。ベトナム社会主義は、南北統一を境に、ベトナム戦争中の「貧しさを分かち合う社会主義」から「豊かさを追求する社会主義」へと変貌を見せつつあるが、こうした意識の変化は、ファッション面から始まったのである。

友人らがすてきなブラウスを着ている場合、若い女性たちは、「その服いいわね」に続けて、「どこで買ったの？」ではなく、「どこで作ったの？」という聞き方をする。ファッション革命が訪れたとはいえ、戦後なおかつ困難な時期にあつて、完成品を求めることは容易ではない。若い女性は、生地を買い、自分でデザインし、これを専門の仕立屋に頼むのが普通なのである。仕立職は、専門商のほかに、失業苦のなか、高校や大学を出ても就職先をすぐには見つけることのできない高学歴女性らによつて支えられている。

第二のムーブメントは、特に一九八六年に始まるドイモイ（刷新）と開放化政策の遂行によつて、もたらされたものである。まだ絶対数は多いとは言えないが、上述したジーンズやスラックスの中にスカートが出現（正確には「復活」といえよう）してきたことである。統制色の強い社会主義の中からダンスホールが芽生えてきたのは八〇年代の初頭、これが普遍化していったのがドイモイの時期であるが、スカートは、少なくとも都市部のダンス愛好家にとつて必需品となっている。そして、このダンスホールから抜け出してきたスカートは、昨今は、そろそろ街中の若い女性たちの、ジーンズやスラックスに代わる新しい衣服へと転じつつある。彼女らが、サンダルに代えて靴を意識するようになったのも、このためである。

Tシャツも見られるようになった。Tシャツは、開放化政策の影響で、密輸も含めて、従来からのタイに加え、香港や台湾、中国などからもたらされるものが主である。

農村は、これほどの革命的变化を被つてはいない。そこでは、なおかつアオ・バーバーが生き

ている。しかし、従来は茶系統一色であったブラウスは、花柄をも含めて、その多彩化が進みつつある。洗濯用の石鹸が普及してきたからである。

また、この二、三年はサイゴンや北部の諸都市で、女子学生が真白なアオザイを着用するようになりつつある。経済的条件を欠いていたため取りやめとなっていた制服Ⅱアオザイの復活であるが、それでも、この制服の準備には、かなりの金がかかるという。

経済困難の継続が久しいベトナムではあるが、女性のファッションの多様化は、もはや後戻りがきかなくともなっているように見える。

(たけうち いくお／アジア経済研究所地域研究部)